

# 男木島灯台

## 瀬戸内海の道しるべ

白柳 洋俊 正会員 愛媛大学大学院理工学研究科助教

### 瀬戸内海の道しるべ

源平合戦で那須与一が射た扇が流れてきたことから「おぎ」と名付けられたと伝わる男木島は、高松港よりフェリーで40分の高松市沖合に浮かぶ周囲約5km、人口200名ほどの小さな島である。同島の北端には、関西と九州を結ぶ備讃東航路が通っており、男木島灯台は同航路の海の道しるべとして機能している。

### 日本人技術者により設計された西洋式灯台

江戸時代の終わりに日本にやってきた列強諸国は、日本を有力な商売先とみて押し寄せた。しかし、大型船に対応していない日本近海を航行する

のは危険極まりなく、諸外国は日本の開国条約のなかに西洋式灯台を建設することを盛り込んだ。西洋式灯台建設事業は、フランス人技師フランソワ・レオンス・ヴェルニーやイギリス人技師リチャード・ヘンリー・ブランドンをはじめとしたお雇い外国人の指導のもとにその第一歩を踏み出したが、明治も中頃になると外国人技術者の手をはなれ、独り立ちした日本人技術者によって建設されるようになる。男木島灯台もまた日本人技術者の手で設計され、1895（明治28）年5月9日起工、同年12月10日に点灯された。

### 流麗な輪郭

同灯台は、高さ約14mの円筒形の灯

台部と、その前面に併設された平屋建ての付属屋からなる3層構造の石造灯台である。2階までらせん階段が続き、2階と3階の間には青銅製の鋳物梯子が円形状に連結されている。その上部に灯室があり、最上部はドーム型の灯籠が、灯芯部には高さ5mの分銅筒がある。また、灯室直下は円筒形の躯体が帯状に拡張して灯室周囲のペランダを形成しており、曲線を描いて膨らむ流麗な輪郭が目を引く。

### 庵治石造りの灯台

石材には、庵治石の名で知られる御影石が用いられた。庵治石は花崗岩の

一種であるが、そのなかでも特に結晶が小さく、結合が緻密であることから、水晶と同程度の硬度をもつ堅固

な石材である。さらに、風化、変質にも強く、古くは京都男山の石清水八幡宮の再興、高松城築城や大阪城大改築に使われてきた。著名な彫刻家イサム・ノグチもまた庵治石の優れた性質に魅せられ、パリのユネスコ庭園の作品素材に庵治石を使用し、さらには1969（昭和44）年に香川県旧牟礼町（現高松市）にアトリエを構え、庵治石を素材に作品を制作した。

庵治石を用いた男木島灯台は、通常なされる外壁塗装が施されていない。そのきめ細やかな地肌は、沈みゆく夕日に照らされると、湿り気を帯びた輝きをみせる。

### 灯台守り

灯台の脇には、庵治石造りの立派な

#### SHIRAYANAGI Hirotochi

専門は、景観・デザイン、交通工学。土木学会選奨土木遺産選考委員会委員。「いつものまちが博物館になる」をキャッチフレーズに、土木施設に関するアクティブな情報編集・発信を目指すオンライン博物館「ドボ博」運営メンバー。





写真1 コーニス状に拡張して配置したベランダが愛らしい男木島灯台



写真2 備讃東航路を航行する船舶の道しるべとして機能



写真3 灯台の脇にある史員退息所(現在は男木島灯台資料館として利用)



写真4 きめ細やかな地肌をみせる庵治石

諸元

所在地	香川県高松市男木町
完成	1895(明治28)年
形式	石造(総御影石)灯台
設計	通信省
規模	高さ14.17m (地上から頂部まで)



平屋が配置されている。現在は改修によって内部の間取りが大幅に改変されているが、当初は史員退息所と呼ばれる官舎として使用されていた。平屋の脇には、菜園もあったと言う。灯火が石油灯であった頃は、昼夜を通して管理する必要があり、2名の職員が家族とともに住み込み、ほぼ自給自足の生活を送りながらその任に当たっていた。

日本各地の灯台を転々としながら厳しい駐在生活を送る灯台守り夫婦の暮らしを描いた映画「喜びも悲しみも幾歳月」は、1957(昭和32)年に公開され、大ヒットを記録した。男木島灯台も主人公有沢四郎と妻きよ子の9番目の赴任先として登場する。作中では、男木島灯台で業務に当たっ

ている四郎のもとに、息子光太郎がケンカで刺され、危篤との一報が入る。しかし、四郎は、灯台のあかりを守るため、駆けつけることを拒む。灯台守りはいつ何時でも灯台のあかりを守ることに人生を賭していたのだろう。庵治石の湿り気を帯びた輝きは、こうした灯台守りの生き様を示している。といっっては言い過ぎだろうか。

参考文献

- (1) 土木学会編…日本の土木遺産 近代化を支えた技術を見に行く、講談社、2012年
- (2) 上野時生…香川の明治建築、香川県建築設計管理協会、1983年

(担当編集委員…佐藤由子)